

## 29P2-am092

実験的糖尿病性皮膚潰瘍におけるラカンカの効果

○水野 晃治<sup>1</sup>, 小林 恭子<sup>1</sup>, 尾之上 聡<sup>2</sup>, 吉田 智<sup>3</sup>, 鈴木 靖志<sup>3</sup>, 村田 雄司<sup>3</sup>,  
輪千 浩史<sup>1</sup>, 瀬山 義幸<sup>1</sup> (<sup>1</sup>星薬科大学, <sup>2</sup>株式会社コーセー, <sup>3</sup>サラヤ株式会社)

【目的】 近年、生活習慣病である糖尿病の発症が増加している。糖尿病発症時において腎症、網膜症、神経症などの合併症とともに創傷治癒の遅延も認められる。創傷治癒の遅延は細菌感染の危険性が高まり、皮膚壊疽など重篤な病変につながるため、糖尿病患者において重大な問題となる。そこで、糖尿病性創傷治癒モデルを用いて糖尿病の改善を促す作用を有するラカンカ配糖体の創傷治癒及び結合組織構成成分への影響を検討した。

【方法】 ICR マウス(4 週齢)にストレプトゾトシンを尾静脈内投与し、血糖値、体重を指標とした実験的 1 型糖尿病マウスを作成した。このマウスの背部に直径 6 mm 大の円形の開放創を作成し、control 群として水、ラカンカ低濃度投与群としてラカンカを 4.5 mg、ラカンカ高濃度投与群として 9 mg を毎日経口投与した。control、ラカンカ低濃度、ラカンカ高濃度それぞれの創面積を観察し、また、開放創作成後、0、1、3、5、7 日目の創周辺部位の組織を採取し、全 RNA を抽出し、RT-PCR 法を用いて結合組織構成成分の mRNA 発現を解析した。

【結果】 ラカンカ低濃度、高濃度と濃度依存的に創面積の縮小を促進した。ラカンカ高濃度投与群では遺伝子発現に変動があった。

【考察】 ラカンカ高濃度では創面積の縮小を優位に促進したことから、ラカンカは糖尿病性皮膚潰瘍治癒を促進すると考えられる。また、遺伝子発現に変動が認められたことから、結合組織構成成分の遺伝子発現を糖尿病性皮膚潰瘍治癒効果の指標とすることができると考えられる。